

# 『文化系統学への招待』合評会報告

July 28, 2013

合評者 伊勢田哲治（京都大学）

## 1 本書全体について

- ・文化系統学という新しい領域の可能性を検討する野心的な本
- ・タイトルから想像されるパターン研究だけでなく、文化進化のプロセス研究も紹介される。
- ・パターン研究の面では neighbor-net などの系統分析手法の文献学への応用だけでなく系統比較法 (PCM) のようにすでに解明されている系統関係を使った仮説検定の手法も紹介されているし、プロセス研究ではクブラーの美術史的な仮説と、生物学や心理学の観点から模倣や教育の役割を検討する研究の両方が紹介されるなど、テーマ設定が多面的で勉強になる。
- ・とりあげられる「文化」の内容も多様（「おわりに」で編者も指摘）
- ・新しい分野のはじまりを告げる本であるわりには著者たちの主張は非常に堅実。むしろ堅実にすぎるくらい

## 2 序文で提示される問い

ア「文化進化に生物学的な方法論が適用できるのだろうか。」

イ「具体的なレベルでどのような現象について系統学の方法論は有効なのだろうか。」

ウ「文化的構築物において…何をよりどころにして系譜関係を考察すればよいのだろうか。」

2-1 アの問いについては2～4章が肯定的な答えを提示。しかし、2章や3章のようにこれから系統関係を明らかにしようとする場合、「答え合わせ」はどうやってやったらよいのだろうか。生物学的な手法をあてはめた結果描かれた系統樹が「正しい」系統樹かどうかの評価、あるいはそうした応用が一般的に正確な系統樹を生む傾向が高いかどうかという「信頼性」の評価はどうしたらよいのか。そもそも系統関係もなにもないところに系統をみせてしまっている可能性はどうやって排除すべきなのだろうか。

2-2 上の疑問がクリアされたなら、イへの答えとして、矢じり、百鬼夜行絵巻、専応口伝をはじめとする写本などが「どのような現象について」の答えになる。では、一般化するとどういえる？ 思いっくまに一般化できそうな特徴を挙げてみる。

- ・文化的産物（写本、矢じりなど）の集合が歴史的な系統関係を形成していることが想定できる。（「歴史的」というのはどのくらい本質的な条件？）
- ・個々の文化産物がいくつもの形質を持つ（変数の列として表現できる）
- ・それらの形質（の組み合わせ）は文化的産物の中で継承される（完全に忠実ではないがある程度の忠実さをもって）
- ・文化的産物どうしの中で形質の組み合わせのパターンに一致する部分と相違する部分が存在する。

- ・文化産物の数は数十もあれば十分？（あまり少ないと問題？）
- ・混態はあってもいい（あまり多いと問題？）
- ・個々の文化的産物がある時点での特徴を保存していることは重要？

こうした一般化は、本書の他の章で扱われている文化的産物（政治体制、建築様式、規範など）に計量的系統分析をあてはめる上でも役に立つはず。→方法論の洗練

著者らは文化系統学の手法のスコープの分析は考えている？

2-3 ウの問いについて、系譜関係判定のよりどころとなりうる形質について、実際に考察されている事例からある程度の一般化はできそう。今のところで挙げた条件に加えて、

- ・同じ形質や形質の組み合わせ（絵の順番、文字を形質としたときの文字列など）が偶然（系統関係によらずに）再起する確率が十分に低い
- ・系統関係がある場合にはその形質（組み合わせ）が再起する確率が十分に高い
- ・その形質（組み合わせ）がどう継承されるかについてある程度リーズナブルなシナリオ（メカニズム）が描けることは必要？

すぐに思いつくのはこのくらいだが、もう少し条件は必要だろうか？（PCMはこの問いに答える上ではどのくらい使える？）

### 3 本書を読みながら気になった点

- ・生物をお手本として文化進化を考えることに暗黙のうちに含まれるバイアスは存在しないか？  
より具体的には

-文化現象における異なる系統の融合の役割を過小評価するバイアスは働かないか？分岐ばかりでめったに合流しない生物をパラダイムとすると、それと似たような構造を自然に探してしまいがちになるのではないか？たとえば小説の系譜関係を考えると、著者が単一の小説にだけ影響を受けるということはまずありえないので、「系統樹」型とまったくちがうイメージが必要になるはず。

-文化進化の異種混合性のようなものが過小評価されるバイアスは働かないか？生物の進化は生物個体という同種の存在の間で基本的に発生するが、文化的影響関係はジャンルを自由に超えて行き来する。そうした面に眼がいきにくくなるのでは。

（・文化系統学を「学問」にするためにはこのような点に目をつぶってある程度禁欲的になる必要がある？）

### 4 どうでもよい点

177ページで「集合論でいうベン図として単系統群の階層構造を表現できる」とあるが、178ページに例として出ているのはオイラー図では？集合論ではすべての組み合わせの可能性が表現されているものをベン図と呼ぶはず。（もちろんカテゴリーが多すぎなければベン図でも表現できなくはない）